

ひきこもり支援としての居場所事業の意義の検討  
— もう一つの選択肢という観点から —

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
障害・行動分析クラスター  
河合 誠也

現在日本において行われているひきこもり支援の一つとしての「居場所」は、一時的に利用するものであるとする見方が一般的である。

しかしながら、予備調査として本論文著者がフリースクールで1年間ボランティアスタッフとして活動した結果、「居場所」の利用者の約8割が「居場所」を社会参加の選択肢の一つとして維持した状態で、他のコミュニティに参加していることが確認された。

そうした結果を踏まえ、選択という観点からの「居場所」の意義を実験的に検討することを本研究の目的とした。

実験参加者は大学院生であり、課題の取り組み方として、「居場所」や「職場」などを模した4つの選択肢を作成した。フェイズⅠでは、その中で2つの選択肢が提示された状態でそれらを選択し、その選択肢に沿って課題を6試行繰り返した。その後、フェイズⅡでは選択肢を一つ追加し選択肢が3つとなった状態で同様の試行を6試行繰り返し、選択の傾向の変化を分析した。

実験の結果、「居場所」の選択肢を追加された参加者が、フェイズⅠから存在していた「職場」の選択肢をより選択するようになるといった変化が示された。そうした結果となった理由の一つとしては、「職場」と同様の社会的要因を含んだ「居場所」という選択肢を追加したことによって、「職場」が社会性という文脈下での自由選択場面の選択肢の一つとなり、より好ましいものと認識されるようになったからではないかと考えられる。